

パラグアイ農村のある家族の物語

——「わたしたち」のフィールドノートより

藤掛洋子

はじめに

本稿の目的はふたつある。南米パラグアイ共和国（以下、パラグアイ。人口約696万人〔2018年、世銀データによる〕）の農村部で生きるある夫婦の物語を記録として残すこと、そしてこの物語から文化人類学者／開発人類学者であり、「ジェンダーと開発」研究者である筆者が何を考える必要があるのかを検討することである。「ある夫婦」を本稿では、Vさん夫婦と呼ぶことにする。筆者と長い付き合いとなったVさん（女性、1962年生まれ）とその夫のCさん（男性、1943年生まれ）の物語には、Vさん夫婦の子どもたちの死を巡るもの、娘たちの出稼ぎ、家族の貧困、家庭内暴力などが含まれている。

筆者とVさん夫婦との関わりは1993年1月に遡る。筆者は、1993年1月に国際協力事業団青年海外協力隊の家政隊員^{〔1〕}（以下、隊員）として、パラグアイ農牧省に派遣され、カアグアス県にある農業普及局に配属された。そして、1995年2月まで生活改善普及員として農村において栄養・生活改善にかかる活動を行った。Vさんは、筆者がカアグアス県農村部36か村において講習会を行っていた際、その中のひとつの村であったS村で講習会に参加した女性のひとりである。Vさんは、公用語^{〔2〕}のひとつであるスペイン語は流暢に話せなかつ

たものの、筆者とのゆっくりとしたスペイン語による意思疎通は十分に可能であった。Vさんは、発言も少なく、おとなしく、優しい性格の女性である。夫のCさんとも家族ぐるみで関わりを持つようになるが、筆者との最初の関わりがVさんであることから、本稿では、夫婦の話として取り上げる場合は、Vさん夫婦と表記する。

筆者は1995年2月に隊員活動を終えて日本に帰国した。その後、1997年より⁽³⁾パラグアイに戻り、調査研究ならびに国際協力の実践を行っている。Vさん夫婦とは、隊員時代のみならず、研究者、そして実践者としても関わり、村を訪問した際にはVさん宅に宿泊させてもらうこともある。Vさんの夫Cさんはスペイン語がほとんどできないため、筆者がCさんにインタビューをする時は、Vさんが通訳に入りインタビューを継続する。

調査方法は、断続した参与観察とインタビューである。インタビューは、Vさん個人、Vさん夫婦、子どもたち（ふたりの子どもは後に死亡）、出稼ぎ中の子どもたちである。出稼ぎ中の子どもたちへのインタビューは、ソーシャル・ネットワークを利用している。調査研究にあたり、Vさん夫婦ならびに子どもたちに対しては、フィールド調査の目的を訪問の度に説明している。承諾を得た上でインタビューならびに写真撮影を行うとともに、それらのデータの論文等への使用許可も得ている⁽⁴⁾。息子たちの死についてはセンシティブなテーマであることから、改めて2019年9月に再度個人が特定され得ない形で論文掲載の許可を得た。

Vさん夫婦について

Vさんは1962年に生まれた。Vさんの実家は農家であり経済的には豊かでなかった。小学校は6歳から12歳まで通ったが3年生の時に留年した。夫のCさんは1943年に生まれた。Cさんは兄弟姉妹が多く、Cさん自身は小学校3年で就学を中断したため文字がほとんど読めない。Cさんが39歳の時、S村で20歳のVさんに出会い、交際が始まった。そして、Cさんが40歳になった時にふたりは結婚した。

「3か月間の交際だった。彼は昔、アルゼンチンにペンキ屋として出稼ぎに行っていた」とVさんは語る。

Cさんは父親から受けついた土地を6ha所有している。その土地にCさんはパラグアイ政府が当時奨励していた綿花を栽培していたが、綿花価格の暴落により1995年頃より家にお金がまったく入らなくなってしまった。Cさんは妻であるVさんや子どもたちに暴力を振るうことが多くなった。Cさんの父は、Cさんの母やCさん、そしてCさんの兄弟や姉妹たちに暴力を振るってきた。ズボンの皮ベルトで打たれることが多かったという。Cさん自身は、「言うことを聞かないと殴ってもよいとずっと思ってきた。父親がそうだったから」と過去を回想して語ってくれたことがある。Cさん自身も暴力の被害者であることから、暴力の連鎖に加え、経済的な困難がCさんの妻Vさんや子どもたちへの暴力に向かわせたと推察された。

Vさんは、左利きのため昔は何事も上手にできなかった。Vさんと筆者の出会いは先に触れた通り、筆者が生活改善普及員として村で生活改善のための栄養指導や編み物（パラグアイのクロチェ *crochet* [レース編みのようなもの]）を指導していた時である。Vさんは、筆者のことを以下のように回想した（藤掛 2004:210）。「私が自分でも何かできるって思ったのはヨーコが私に編み物を教えてくれた時です。私は左利きで不器用なため編み物などまったくできませんでした。あまりにもできなくて泣き出してしまったのをヨーコは覚えているでしょう。でもヨーコが左手で編み方を教えてくれて、少しずつできるようになりました。あの時、私にもやればできるんだということがわかりました」。そして、Vさんは、娘にクロチェを教え、娘は学校の先生に褒められるほどになっていった。Vさんにとっては大変誇らしいことであり、幾度となく娘が学校の先生に褒められたこと、それを自分自身が娘に教えたことを語ってくれた。

息子たちの病気と死

Vさん夫婦には5人の子どもがいる。長男は1981年生まれ、次男は

1989年生まれである。それ以外に3人の娘がいる。

長男は、5歳頃までS村で野原を駆け回り元気に遊んでいたが、7歳頃から足が動かなくなり、力が出なくなっていった。筆者も村を駆け回る長男のことをよく覚えている。Vさん夫婦は歩けなくなっていく息子のことが心配で、カアグアス県内にある病院に長男を連れて行った。貧困な農民であることから病院の外で長いこと待たされ、医師からは十分な説明もなされず、原因も治療法もわからなかった。そのためCさんは親戚が出稼ぎに行っているアルゼンチンの病院に息子連れて行くことを1995年に決意した。筆者が帰国してからのことであった。Cさんは、家にいる牛と所有している土地の一部を売り、約3,000,000 G（当時で約1,514ドル）を手にした。

1995年8月のある晴れた日の明け方、Cさんは50kgほどの体重がある14歳の長男を腕に抱き抱え、テラロッサといわれる赤道道を2kmほど歩き、隣村のバス停までたどり着いた。その村から5.5km離れた国道まで出るため赤道道を走る小さなバスに乗った。そして国道2号線で再び大きなバスに乗り換え、その交差点から158km離れた首都アスンシオンのバスターミナルまで行った。バスターミナルからはタクシーを拾い、アルゼンチン行きの船がでる船着き場まで行った。Cさんは、長男を抱きかかえての移動であったため、船着き場まで行くのはとても大変だった、と回想した。船着き場で船に乗り、なんとか息子とともにアルゼンチンに到着した。そしてアルゼンチンの波止場から再び電車に乗り継ぎ、目指す親戚の家によろやくたどり着いた。交通費がいくらかったかは、覚えていないという。農村に住む経済的に困窮している親たちは、子どもが病気になった時、多くの困難があることがこの事例からもわかる。

翌日からCさんは、息子を抱き抱え、親戚の家の近くにある〈ママ〉病院に毎日通った。牛と土地を売って得たお金3,000,000 Gは、パラグアイからアルゼンチンへの移動費と長男の病院の支払い、そして生活費に使った。親戚も多くの援助をしてくれたが甘えてばかりいるわけにもいかなかった。その後7か月間アルゼンチンに滞在し、「息子の脳を切開し、医師が必要と考える複数の検査をしたり、

採血したりと様々な検査をした。投薬も続けた」という。しかし、牛と土地を売って得たお金は尽きた。そのため、治療を止め、再び息子を抱き抱え、来た道に戻って、アルゼンチンからパラグアイの首都アスンシオンに戻り、また同じ道を通してS村にふたりは帰った。当時、S村にはCさんが会員になっていた農協がまだ機能しており^[5]、Cさんの子どもが病気だということから、農協に預金している会員が受け取ることのできる福利厚生の一環として200,000G(当時約111ドル)を農協がCさんに補助してくれた。

しばらくの間、長男はS村で生活した。トイレに行きたいと長男が言えば、Cさんが抱き抱えて連れて行った。トイレは、家の外にある小さな小屋の中の、地面に穴が掘ってある場所である。Cさんは、長男のズボンと下着を脱がせて排泄の世話をした。村には電気が通り始めた頃だったが、Vさん夫婦にはお金がなく、藁葺き屋根の家に当時、電気を引くことはできなかった。車椅子を買うようなお金もVさん夫婦にはなく、仮に車椅子を社会福祉団体などから寄贈されても、村の道は赤土道で車椅子が使えるような状況ではなかった。長男は調子が良いときは座ったまま生活する時もあった。

2004年8月^[6]、長男の病状が悪化したため、農協の補助金200,000Gを使って救急車を村のはずれまで呼んだ。Vさん夫婦は長男を連れて救急車まで徒歩で向かい、3人で救急車に乗り込んだ。3人が救急車に乗るのは初めてだった。アスンシオンに到着し、長男を病院に入院させた。金曜日のことだった。Cさんは長男を病院に入院させると、妻のVさんを残し、長男の衣類や生活費を取りに村に帰った。再び158kmの道のりをバスで戻り、隣村まで行く小さなバスに乗り換え5.5kmの赤土道を揺られた。隣村から2kmの赤土道を歩いて藁葺き屋根の自宅に帰宅した。

Cさんがいなくなった病院で、長男は病院の窓を眺めながら、「パパが戻ってこない」とつぶやいた。そして、日曜日、母親Vさんだけに見守られて静かに目を閉じた。「天に召された」のである。

筆者は、長男がなくなって間もない時に村を訪問し、大きなショックを受けた。この時のショックは、自分自身が研究者としてのみ

ならず、実践者^[7]として二足のわらじを履いて生きていく決意を新たにした時であった(藤掛 2009: 253-255)。

Vさん夫婦には、亡くなった長男以外に長男と8歳離れた次男がいた。次男も子どもの頃は元気に村を駆け巡っていたが、7歳ぐらいになるとだんだん歩けなくなっていった。亡くなった長男とまったく同じ症状であった。筆者も次男が村を走り回っていた姿をよく覚えている。筆者が行う生活改善の調理講習会や調査の時には、野菜を運んだり、世帯訪問の際には、よくついてきては、筆者が何をしているのかと物珍しそうにノートを覗き込んだりしていた。

Vさん夫婦は、村の中でも特に経済的に困窮している家庭のひとつであり、次男の治療費を長男の時のように捻出することはもはやできなかった。次男は治療を一切受けておらず、具合が悪くなってからは家の中で座ったり、寝たりして過ごしていたという。排泄の世話をできる者がいない時もあり、大小便を垂れ流している時もあった。次男が23歳になった頃には身体がかなり弱っていた。

2012年12月のことを、Vさんは回想した。具合が悪化した次男に「水がほしいか」と聞くと、次男は「うん」と応えた。Vさんが次男に「お腹が減ったか」と聞くと「うん」と応えた。そして、藁葺き屋根の家にある簡素なベッドの中で次男は静かに目を閉じた。「天に召された」のである。

Vさん夫婦は、筆者がフィールドワークで訪問するとこれまでも長男と次男のことを語ってくれたり、埃がつかないように大切にしまわれた写真を見せてくれたりした。写真は、寝室からいつも持ち出される。赤土まみれのくしゃくしゃになったビニール袋にしまわれている長男と次男の写真は家族で写った写真と長男の葬儀の写真である。出稼ぎ先の娘の写真もある。そして、「どうしてやれることもなかったんだ」と言って、黙り込み、涙ぐむ。

筆者は、Vさん夫婦が抱える大きな悲しみに対し、何ができるのだろうかといつも考え込んでしまう。貧困や支援、格差について深く考え続け、研究実践を行う者として自分なりの答えを出す必要があると考え実践も継続している。

長女のこと

長女は、兄が病気で2004年に他界し、弟が兄と同じ病状を発症し、2012年に他界したこと、このようにふたりの息子が立て続けに亡くなったことに対し母がひどく落ち込んでいたことに胸を痛め、スペインに出稼ぎに行くことを決意した。パラグアイ人の男性と結婚して2年ほど経った時である。はじめに夫とふたりでスペインに出稼ぎに行ったものの、夫と折り合いが悪く離婚するために一度パラグアイに戻った。そして、夫と正式に離婚した後、一人身となり、ひとりでスペインに出稼ぎに行き、現在もスペインで家事労働者として働いている。

長女は、出稼ぎで得たお金をVさんたちに仕送りし、2014年に藁葺き屋根の一部（家の前方）を建て替えた。そして、2015年には冷蔵庫と中古の洗濯機を母Vさんのために購入した。さらに、翌年には追加で新品の洗濯機を購入し、残りの家の後方部分の建て替えを継続している。2018年にはパラグアイ人が好むパイプ式の椅子と食事のための椅子とテーブル、新たな冷凍庫、調理用キッチンも購入した。

長女はおおよそ2年に一度の割合でS村に戻り、2週間ほど滞在し、家財道具などを買い足しては、再びスペインに戻っていく。2019年8月にも一時帰国し、Vさんに1,000,000G（166ドル）を置いていった。そして、Cさんの農業が立ち行かないため、サトウキビ栽培用の日陰棚を購入する費用として1,000,000Gを父親に置いていった。長女はお金を一時帰国で持ち帰ってくる時があれば、銀行口座に送金することもある。Vさんは、スペインにいる長女から電話がかかってきたらそれは送金の連絡であり、ごく手短かに長女と話し、すぐに銀行にお金を引き出しに行くという。長女はパラグアイに戻るつもりはない。

次女のこと

Vさん夫婦の次女はアルゼンチンで出稼ぎをしている。次女には10歳になる息子がいるが、この男児はVさん夫婦とS村の新しい家で一緒に暮らしている。次女は、23歳の時に交際していた男性との間に子どもができ、出産したがふたりは結婚しなかった。その後、次女は、アルゼンチンで出稼ぎをしている叔母を頼って出国し、叔母の家に居候しながら、現地人の家で通いの家政婦として働いている。次女は、現在、違う男性との間にできた2歳になるもうひとりの子どもと叔母の家で一緒に暮らしている。子どもの父親である男性は嫉妬心が強く、一緒に暮らしていくのが大変であると感じたことからすでに別れ、叔母の家に転がり込んだという。叔母の家でも家事労働をして100,000ペソ(約18,000円)ほどを毎月もらっているという。

パラグアイ農村部の女性たちが家事労働者として首都のみならずアルゼンチンで出稼ぎをしている事例は1993年頃から多く見てきた。その後、スペイン語が通用するスペインへの出稼ぎも増加している。この点についても今後研究を深めたいと考えている。

止んだ夫の暴力

Vさんは自分が20歳、夫が40歳の時に結婚し、37年間一緒に暮らしてきたが、その内のおおよそ32年間は夫からの身体的・精神的暴力に苦しんできた。2001年3月のVさんの語りは以下であった。「夫が暴力を振るい始めると、もうこんな家には居たくないと言って、私は隣人の家に逃げこみます。そうすると夫は怒って追いかけてきます。私は(講習会に参加して)暴力を振るう男性と一緒に暮らしたくない、といって抵抗することを覚えたのです」(藤掛2004:210)。また、Vさんはその後、「昔は夫が強く、これまで家庭内暴力を振るわれてきました。私は怖くて発言などできませんでした。しかし、講習会に参加してから私は変わりました。今では夫と平等です。今の私は

とても変わりました。今の自分にとても満足しています」(藤掛 2008: 117)。

このように、Vさんが家庭内暴力を振るう夫に対し、抵抗し、交渉することができるようになった。後にVさんは、「新月になると、少し前の夫は相変わらず暴力を振るうことがあった」というが、出稼ぎに行った娘がスペインから帰国して、2014年頃から家にお金を入れるようになると暴力を振るわなくなった。また、Cさんは娘から「暴力はいけない。言葉の暴力もいけない」と言われて、近年はまったく暴力を振るったりするようなことはなくなった。Vさんは「娘のことを愛している」と語る。

おわりに

この物語は、Vさん夫婦とともに筆者が紡いできたものである。この物語から、筆者はいくつかの新たなテーマを与えられたと考えている。第一に、農村部の人々の日常実践を記録として残さなければならぬという再度の決意である。研究者として実践者として村の方々とともに歩んできた歴史や、その中で知り得たことで、調査協力者に出版することを承諾されている記録を村の歴史として書き記すことは私の宿題である。第二に、パラグアイの村社会にあるジェンダーやマチスモ(男性優位)思想、女性の移動についてさらに研究を深める必要がある。農村部の女兒が首都アスンシオンや近隣諸国、スペインなどに出稼ぎに出て仕送りをする事例は昔から多くある。しかし、パラグアイ農村部に出稼ぎ女性労働者にかかわる研究の蓄積はあまりない。パラグアイの農村部の女兒たちが出稼ぎ先で家計に貢献することについても十分な調査はない。移動とジェンダー研究では、女性の出稼ぎにかかわる多くの蓄積があることから、それらの研究を先行研究とし、パラグアイの農村女性の出稼ぎについての検討を進めたい。第三に、貧困とジェンダーに関連する研究の深化である。Vさん夫婦の状況は、パラグアイの農村部に特徴的であるマチスモ(男性優位)思想と貧困、格差、階層などが複雑に交差する

中で生まれていると考える。クレンショーは、インターセクショナリティ (intersectionality) という概念を提示している (クレンショー 2008)^[8]。Vさん夫婦の事例は、文化やジェンダー、開発だけでは分析できないものもあり、Vさん夫婦が担ってきたものをこの概念を用いて分析することも次の課題であると考ええる。



図1 Vさん夫婦の台所(1993～2014年頃まで)



図2 建て替えがされているVさんの家の倉庫

謝辞と追悼

S村に戻ると家と食事を提供してくださり、家族のようにともに時間を過ごしてくださるVさんご夫婦とお孫さん、そして筆者をいつも受け入れてくださるS村の皆さまには心より感謝します。また、出稼ぎ先から筆者とコミュニケーションをとってくださるVさん夫婦の娘さんたちにも心より感謝します。そして、Vさんの長男と次

男の歴史を本稿に収めることをご承諾くださったVさんご夫妻とご家族に感謝します。長男と次男。おふたりのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

註

1. 2018年秋にJICA海外協力隊と名称が変更されたが、本稿では当時の名称である「青年海外協力隊」と表記する。また、当時、家政隊員と表記されていた職種名は、2011年度より「家政・生活改善」に変更された。
2. 1992年に制定されたパラグアイ共和国憲法第140条に示されている通り、パラグアイではスペイン語とグアラニー語が公用語であり、特に農村部では日常生活においてグアラニー語が用いられている。パラグアイにおけるグアラニー語の歴史の変遷等は青木(2003)に詳しい。
3. 1997年以降の調査記録等はこちらも参照されたい。<http://yoquita.com/>
4. 横浜国立大学の倫理規定に則っている。
5. 農協は1992年に設立されたが、現在は機能していない。
6. Vさんは長男の死亡した年を2004年と言ったり、2001年と言ったりすることがある。筆者は2004年8月に村を訪問し、Vさん夫婦宅にも行った際、長男の葬儀直後の遺影が寝室に飾られているのを見ていることから、長男が死亡したのは2004年であると考えている。
7. 1995年よりNGOミタイ基金、2014年11月より特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニャイ子ども基金代表理事としてパラグアイ他で国際協力の実践を継続している。ミタイはパラグアイの先住民族の言語グアラニー語で男児を、ミタクニャは女兒を表す(活動の詳細はこちらに記載 <http://mitai-mitakunai.com/>)。
8. 徐(2018)は、インターセクショナリティ(intersectionality)を以下のように解説する。intersectionality(交差性)とは、人種、エスニシティ、ネイション、ジェンダー、階級、セクシュアリティ等、さまざまな差別の軸が組み合わさり、相互に作用することで独特の抑圧が生じている状況を指す。

参考文献

- 青木芳夫(2003)「パラグアイにおけるグアラニー語と先住民族」、『総合研究所所報』、11号、pp.87-107。
- クレンショー、キンバリー・W(2008)「固定化を超えて 人種、ジェンダーと(不)平等に対する保護をめぐる新しい地平」『世界のジェンダー平等 理論と政策の架橋をめざして』、辻村みよ子他編、東北大学出版会、pp.135-147。
- 徐阿貴(2018)「人権の潮流：Intersectionality(交差性)の概念をひもとく」、『国際人権ひろば』、No.137(2018年1月発行号)。<https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section4/2018/01/intersectionality.html> 2019年10月31日最終アクセス。

- 藤掛洋子 (2004)『パラグアイにおけるカンペシーナの主体構築過程に関する研究——研究／調査者と実践者の往還から見た開発協力——』、お茶の水女子大学大学院博士学位論文。
- (2008)「農村女性のエンパワーメントとジェンダー構造の変容——パラグアイ生活改善プロジェクトの評価事例より——」、『国際ジェンダー学会誌』、6号、pp.101-132。
- (2009)「研究と実践の往還を超えて パラグアイにおける開発援助と参加型アクションリサーチ」、『フィールドワークの技法と実際Ⅱ 分析・解釈編』、箕浦康子編著、ミネルヴァ書房、pp.240-258。
- フィールドノート。

(都市イノベーション研究院・教授)

